昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成7年10月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 287

1995 OCTOBER

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1996年登山隊員募集

玉珠峰（6,179ｍ）

世界の屋根である青蔵高原に美しいスノーピークがあります。短い期間で高峰にアイゼンをきしませたいと考えておられる方のために22日間のキャンプを企画しました。（ＨＡＪでは既に２度登頂）

青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には１週間滞在の予定です。

記

1. 期　　間:1996年７月21日～８月11日(22日間)
2. 募集人員: 10名程度
3. 負 担 金:60万円
4. ㌢ 切 り:定員になり次第
5. 資料請求先:ＨＡＪ事務局

ムスターグ・アタ（7,546ｍ）

シルクロードのド真中、パミール高原にどっしりと腰を据えて聳え立ち現地に住む人々から「氷山の父」として親しまれているムスターグ・アタでサマー・キャンプを行います。なお、アタを舞台としたサマー・キャンプはこの年をもって最後とする予定です。

記

1. 期　　間:1996年７月21日～８月25日(36日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円
4. ㌢ 切 り:定員になり次第
5. 資料請求先:ＨＡＪ事務局

ヌ　ン（7,135ｍ）

インド・ヒマラヤのサマーキャンプとして、1996年夏もカシュミール・ヒマラヤで開催します。

カシュミールの盟主ヌンの高峰登山とラダックの素晴しい雲上のヒマラヤの旅が楽しめます。

記

1. 期　　間:1996年７月21日～８月25日(36日間)
2. 隊　　員:10名
3. 費　　用:75万円
4. ㌢ 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:ＨＡＪ事務局まで

表紙写真

ティリッチ・ミールのアッパー・ティリッチ氷河からのルートは、ＢＣから6,800ｍまでの標高差2,000ｍ、水平距離で約12㎞の氷河歩きである。ＢＣの対岸にあるグール・ラシュト・ゾム東峰からティリッチ・ミールを見ると東峰と西峰群を従えた主峰は大空をはばたく鷹のような姿で峻立し、その下をアッパー・ティリッチ氷河が一条の線となって落下していた。

（ハイ・アドベンチャー登山隊）

ヒマラヤ No.287

1．静かなる山 ティリッチ・ミール登頂

12. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉

14. チベット自治区発足30周年とパンチェン・ラマ後継者問題

16. インド・ヒマラヤを楽しむ（４）
— 西シッキム ダージリンからガントックへ —

19. 中国高峰登山15年小史(7)　山森欣一

24. 寸感・事務局日誌

静かなる山　ティリッチ・ミール登頂

日本ヒンドウ・クシュ登山隊－1995－

（バーバリアンクラブ）

はじめに

昨年11月の東京集会の時だった。以前からこの集会で顔見知りだった岩崎さんより「来年（'95）どこか行かない？」という誘いを受けた。ヒマラヤ諸国や南米を放浪して生活している彼との登山は大変面白そうな登山が出来そうだ。又、私はちょうどネパールでの登山を終えたばかりで、次の遠征を検討中だったのと酒の勢いも手伝って、登山計画は始まった。

二人の共通の考えは、金をかけずに、国内の山を登る様に気軽にシンプルな登山を楽しみたい、というものだ。できればあまり人の入らないエリアで静かに自分達だけの登山をしたい。という事で、高いロイヤリティなどで何かと金がかかり、多くの隊が入り乱れる8,000ｍ峰より7,000ｍ峰が安く面白い登山が出来そうだ。

私達は以前より興味のあったパキスタンのヒンズー・クシュエリアの7,000ｍ峰という事で意見は一致した。

ヒンズー・クシュ山脈は中央アジアのパミール高原より西に発し、パキスタン北部を通りアフガニスタンまで達している。この山脈のヒンズー・クシュとは「インド人殺し」の意味だそうだ。古くから山稜上の峠はシルクロードの一部として利用されていた。

位置的に政治的な問題や、ティリッチ・ミール山域に入ると２年後に必ず死ぬ、などの迷信などによってこの山域への登山の開拓は遅れたといわれる。

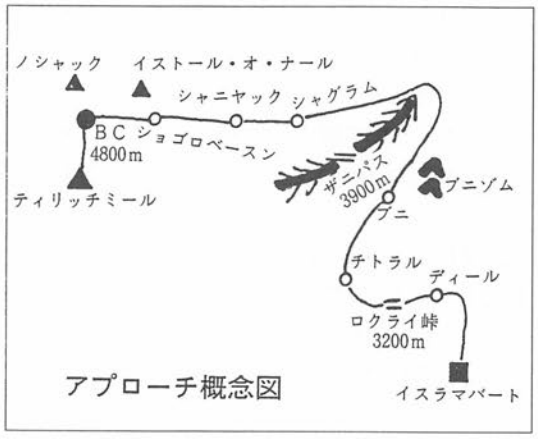
その後1950年にティリッチ・ミール主峰がノルウェー隊によって登られ、60～70年代にかけて数多くの隊がこのエリアへ押し寄せたが現在はカラコルム・ハイウェイの開通や8,000ｍ峰、7,000ｍ峰の数多くあるカラコルムへと出掛け、ヒンズー・クシュは静かな山域となっている。

このエリアのトリコー川からアフガン国境までの山域はハイ・ヒンズー・クシュと呼ばれ7,000ｍ峰がすべてここに集中している。7,000ｍ峰は、ティリッチ・ミール（主峰7,708ｍ）、ノシャック（主峰7,492ｍ）、イストル・オ・ナール（主峰7,403ｍ）、サラグラール（主峰7,349ｍ）の４山群が主峰を中心にいくつかの7,000ｍ峰を従えた独特の山塊を作り出している。そして私達はこれらの7,000ｍ峰でも最高峰のティリッチ・ミール主峰を目標の山に決めた。

現在パキスタンのレギュレーションで申請は登る前年の12月までとなっている。早急に申請書類を作り、ロイヤリティ3000＄を払い込み、パキスタン大使館への申請を済ませたのは〆切り間近の12月26日だった。

正月、山行を共にした今村さんにティリッチ・ミール登山の事を話すと参加を希望しメンバーとなる。私と今村さんは過去３回ヒマラヤ遠征を共にし、その時の隊長であった人で大変心強い。昨年文子さんとの結婚を機に故郷の山口県で生活している。そして文子さんもＢＣまで同行する事になり、４名の隊となった。

ティリッチ・ミールをどう登るか



アプローチ概念図

私と岩崎さんはＨＡＪルームで顔を合わせる事が出来たが、山口県の今村夫妻を混えての全員によるミーティングは出発までに一回だけであった。

その時、一日かけて以下の事を決めた。

ティリッチ・ミールの初登は南バルム氷河側より行なわれ、その後アッパー・ティリッチ氷河側、ディルゴル氷河側と各方面より登られている。

私達の目標はシンプルな登山であったので、Fixロープを使用せず、大袈裟なキャンプ展開をしないですむ、アッパー・ティリッチ氷河側のルートを選んだ。

このルートはＢＣ（4,800ｍ）より6,800ｍまで標高差2,000ｍ水平距離で約12㎞の氷河歩きとなる。

6,800ｍより西稜とのコル7,300ｍまで高度差約500ｍの氷のクーロアールとなり約15Pの登攀となる。コルより頂上までは雪壁と数ピッチの岩登りとなる。

私達はＢＣ～6,800ｍまでの氷河上はどこにでもテントが張れそうなので、特にキャンプを作らず一張のテントをフレキシブルに動かしてゆく。

6,800ｍからのクーロアールの登攀と頂上まではロープ２本によるスタカット登攀としコルをアタックキャンプとする。

燃料は高価なＥＰＩガスはアタック・キャンプのみ使用し、氷河上のキャンプではガソリン・コンロを使用する。

食糧計画は現地購入の不可能な味噌、梅干し、海苔以外全て現地で揃える。

高所順応。ＢＣに入る前にザニパス（3,900ｍ）に泊まり4,000ｍラインを往復する。ＢＣ～6,800ｍまでは平坦で長い氷河歩きなので、この氷河上の6,000ｍ級の山を登り順応を図る。最後に氷河上の奥に聳えるディルゴルゾム（6,778ｍ）へ登り、アタック前の順応とする。荷上げ量は少ないので極力この氷河の登り降りを減らし疲労を少なくする。

装備類は個装以外ほとんど現地のシルクロードの物をレンタルか買い取りとして日本では揃えない。このため煩わしいアナカン（別送品）を行わずに済む事が出来る。

以上の事をこのミーティングで決めた。

登山隊の概要

１．派遣母体

バーバーリアンクラブ

２．目標の山

山名　ティリッチ・ミール

標高　7,708ｍ

位置　パキスタン、ヒンズー・クシュ地方

３．登山の結果

７月７日　野沢井、岩崎、今村の３名が登頂

４．登山期間

1995年５月下旬～７月下旬

５．各キャンプの高度

ＢＣ　4,800ｍ

Ｃ１　5,800ｍ

Ｃ２　6,300ｍ

Ｃ３　6,650ｍ

Ｃ４　7,300ｍ

６．隊の構成

隊長　野沢井歩　30才

隊員　岩崎　洋　34才

〃　今村裕隆　35才

〃　今村文子　35才

ポーター往路22人、復路９人

リエゾン・オフィサー

キャプテン・アビィド・ジャミール　25才

コック　モハメッド・アリ　28才

ベース・キャンプへ

イスラマバード～ＢＣ

５月29日、いよいよ出発である。大量の荷物をチェックインし、パキスタン航空機に乗り込む。この航空会社は酒が出ないのでビール、ワインを持ち込みイスラマバードまでを快適に過ごす。

イスラマバードに着くと私達の宿となるシルクロードへ投宿。

30日、観光省へ挨拶を済ませ、外国人登録とリキュール・パーミットを取りに行く。これらの手続きに一日掛かってしまう。早速ビールを求めてマリオット・ホテルへ行くが売り切れで買えなかった。

31日、午前中リエゾン・オフィサーが訪れた。

彼は25才、軍隊のキャプテンでリエゾンの仕事は初めてだ。見た感じ生意気そうな顔をしている。

彼と打ち合せを済ませ、彼の装備をチェックしてもらう。彼はレギュレーション・ブックを開き、支給装備を一つ一つ細かくチェックしてゆく。足りない物はもちろん、ＢＣまでで必要の無いアイゼン、ヘルメット、アイス・ハンマーまでも要求してくる。又私達の用意してきた物も色が気に入らないとかで中々ＯＫをもらえない。その度に自分達の粗末な装備を見せたり、切り札のウォークマンをちらつかせたりと一苦労。結局足り無い物、気に入らない物をラワールピンディで買い揃えた。

このリエゾンの装備に関してはリエゾンによって違い、ある隊は装備代として2000＄要求されたり、うるさい事を言わないリエゾンもいる。とにかく日本から新品の装備をきちっと揃えてくれば問題は無いみたいだ。しかし私達みたいな貧乏な隊はそれなりに覚悟が必要である。

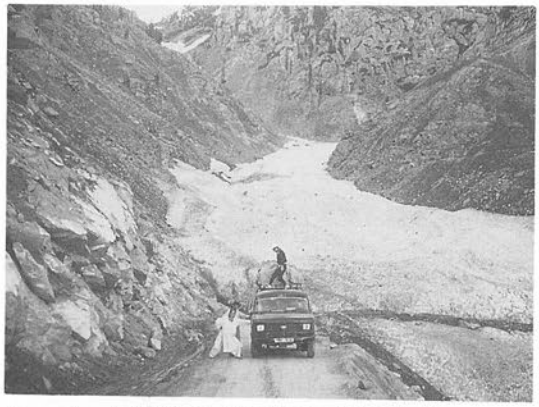
今日もビールは買えなかった。

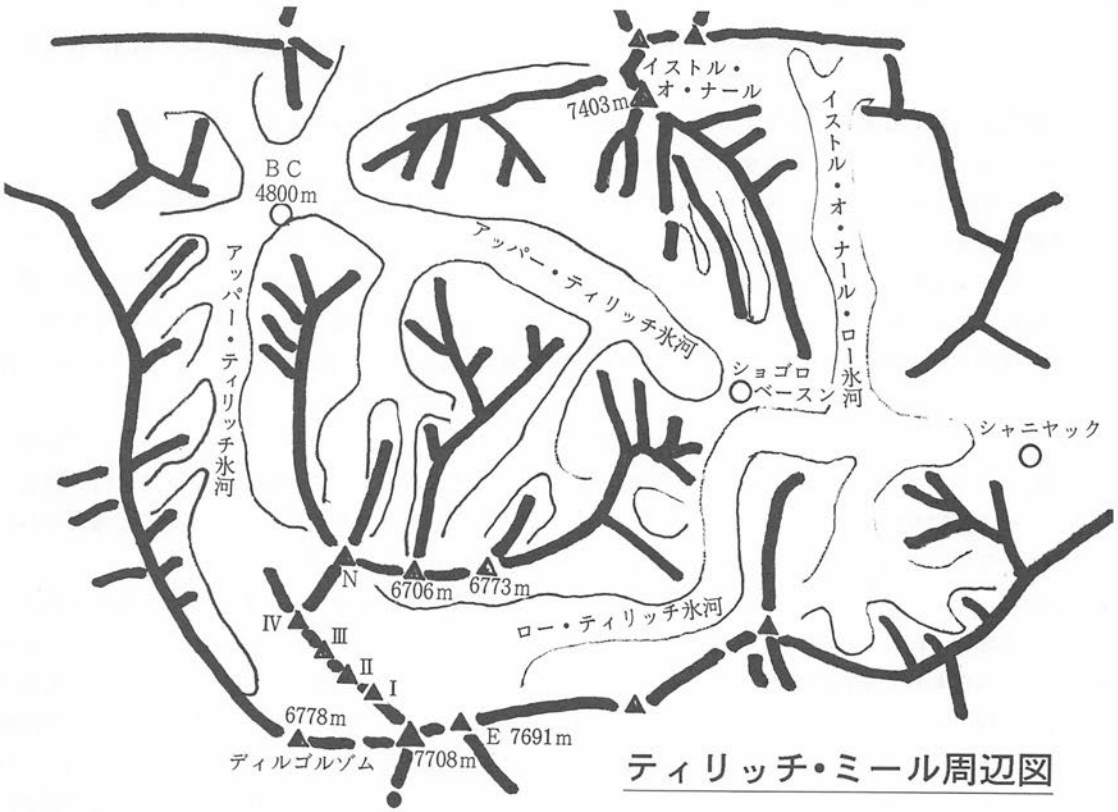
6月1日　今日はブリーフィング。その前にリエゾンと打ち合わせ。彼はなんとレギュレーション・ブックを最初から最後まで読みあげ一つ一つチェックしてゆく。又、食糧を彼自身で揃えるというので１日10＄支払わなくてはいけない。私達は総べてパキスタンフードにするので一緒に揃える事を主張するがだめだった。（現在、登山隊が食糧代として現金を支払うのは当然となっている。）

無事ブリーフィングは終えたが、このリエゾンのおかげですっかり疲れてしまった。

午後はコックを連れてラワールピンディで食糧の買い出し。一軒の問屋みたいな店で夕方まで掛

▼雪渓の残るロワライ峠





ティリッチ・ミール周辺図

かって買い揃える。帰路、再びビールを買いに岩崎さんが行くが不発に終わる。

2日、今日は金曜日、イスラム国の休日である。私達も一日のんびりと過ごす。

夕方、シルクロードのオーナーの督永さん、HAJの飛田さん、寺沢さん達がブルーダル・ピーク登山より帰ってきた。すっかりシルクロードは賑やかになった。

3日、今日一日で梱包を終わらせなくてはいけないので忙しい一日となった。

足り無い物の買い出しや、先日買った食糧の中のビスケットが抜けていてそれを取りに行ったりと皆バタバタと駆け回る。

食糧や装備を買ってきたズタ袋やダンボール箱に詰め込み夕方には終らせる事が出来た。

夜、飛田さん達が焼肉パーティによる壮行会を開いてくれた。私達もやっと念願のビールを闇で入手する事が出来、イスラマバード最後の夜を楽しく過ごす事が出来た。

4日　イスラマバード〜チトラル

チャーターしたワゴンに荷物を満載し、午前5時出発。チトラルまで12時間の旅であるはずだが…。

イスラマを出て5時間程の所で車のサスペンションの板が折れてしまった。これは近くで溶接してもらい無事に出発する事が出来た。

ディールまでは大変暑い。そこからロワライ峠（3,200m）を越えてチトラルへ向かう。ロワライ峠は冬期は雪で閉ざされ最近開通したばかりだ。

予想通り峠道は悪く沢筋は水が溢れ、車体の底は岩が擦る。標高をあげると大きな雪渓が道を覆っている。何回か車を押したりして通過し、夕暮れ時峠へと着いた。

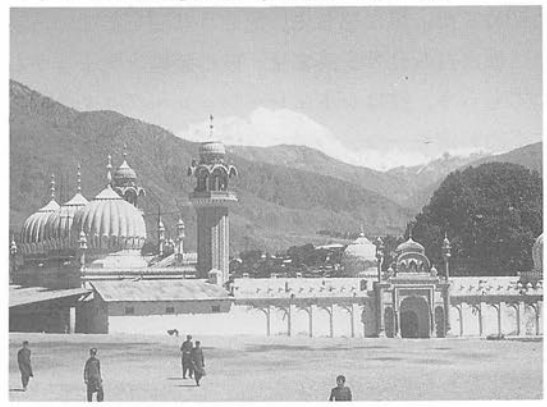
峠の下りも悪路は続いた。そしてなんと屋根の上の荷物がキャリアごと落ちてしまった。暗闇の中茫然とその荷物を押し込み出発する。

このような悪路を抜けチトラルへ着いたのは、深夜2時だった。当然街は静まりかえり、開いてるホテルも無い。何軒かのホテルを回りやっと一軒のホテルへ落ち着く事が出来た。

5日、6日　チトラル

私達の泊まっているホテルからどっしりとしたティリッチ・ミールを眺める事が出来る。これから登る山を見ながらすするチャイはなんともおいしい。暑いイスラマバードで疲れた体を回復させるため、ここで十分休養する。

▼チトラルから見るティリッチ・ミール



チトラルはアフガニスタン国境近くという事もあり、カラヒー（肉と野菜の鍋料理）やティカ（肉を串焼きにしたもの）などの中央アジア風の料理の店が軒を並べている。

7日　チトラル〜シャグラム手前の村

チトラルより車で入れる終点の村シャグラムへ向けて出発。

チャーターした2台のジープに乗り込む。このあたりの道路は中国の援助によって開かれており、ブニまでは快適である。途中トパーズ、エメラルドなどの宝石を採掘する穴が何ヶ所も掘られていた。

ブニの村は北欧を思わせる緑豊かな所だ。ここよりギルギットへ抜けるシャンドゥール峠への道を分ける。私達はトリコー川沿い左岸の道を進むのだが崩れているらしい。遠回りをして右岸へと渡り進む。ブニの村の後方にはブニ・ゾムの山群が素晴らしい。

トリコー川沿いの道よりティリッチ・ゴル沿いの道に入るとますます険しくなってきた。過去、この道でジープが谷底へ転落し死亡する事故が起きているのが解る気がする。

隊荷も体も埃まみれ、もうすぐシャグラムという所で道は崩れていた。取り敢えずスコップなどを出して何とか修理し通過したが、その先も数ヶ所崩れているらしい、コックと共にそれらを偵察するがとても私達の力では不可能に思われた。日も暮れてきたので手前の村に戻り、学校の教室に

一泊させてもらう。

明日ジープが帰る午前中までに村人を雇い道を修理するか、ここからポーターを雇いシャグラムまで行くかの選択をせまられる。コックは修理出来ると主張するが、もし直せなかったら2度手間になると考えポーターによる輸送を決める。

8日　手前の村～シャグラム

朝早くからポーター志願者が集まってきた。彼らにとって貴重な現金収入となるからだ。

25kgの荷物にまとめ22人のポーターと共に出発。シャグラムまでほんの2～3時間の距離だった。

ここシャグラムに数日間スティしてザニパスへ登り高所順応トレーニングを行なう。

9日　シャグラム～ザニパス（3,900m）

シャグラムの村の裏よりザニパスを目指し登る。昔この山域に入るにはこの峠を超えてきた。ジープ道が出来た現在でも、短時間でブニ方面へ抜ける事が出来るのでこの峠は移用されている。

ザニパスからはブニ山群、ティリッチ・ミール山群が眺められトレッキングで来るのにも良い所だと思う。

峠上にテントを張り宿泊。

10日、ザニパス～4400m～シャグラム

テント場を出発し、ザニパスの尾根上の4400mピークを目指す。2時間程で到着する。

ザニパスのテントを撤収しシャグラムへ戻る。

11日　シャグラム

明日からキャラバン開始だ。ポーターの賃金の交渉をするが、予想以上の高額を要求されたが交渉してＢＣまで2泊3日、装備代200RS.を合わせて1人1,150RS（3,500円）でまとまった。

▲シャグラムの子供達

▼シャグラム手前の土砂崩れ現場

12日　シャグラム～シャニヤック

ポーターに誓約書のサインをもらい、全員のＩＤカードを預かり契約となる。サーダー（ポーター頭）を中心にキャラバンは進められてゆく。

既にここまでポーターを使っているのでスムーズにスタートする事が出来た。

お花畑が広がり緑豊かなパンドックの村を通過し昼過ぎにはシャニヤックに着いてしまった。

柳の樹が繁る快適なテント場だった。

13日　シャニヤック～ショゴロベースン

シャニヤックから川沿いの道をしばらく行くとモレーンとなる。モレーンを抜けると氷河の上を歩くようになる。途中大きなギャップを越えたりあまり快適なルートとはいえない。しかしポーター達は25kgの重荷を担ぎ上手に歩いているものだ。

右岸よりローアー・ティチッリ氷河と出会う対岸がショゴロベースンだ。これより先は緑は無くなるのでポーター達はここより一気にＢＣを往復するのだ。

テント場の側の岩でボルダーリングを楽しむ。

14日　ショゴロベースン～ＢＣ

今日はいよいよＢＣ入りだ。パキスタンの山は道路が整備されているので短期間でＢＣ入り出来るので楽だと思う。しかしネパールの山の様に村から村へと歩く長いキャラバンの方が私は好きである。

イストール・オ・ナールのＢＣを通過し氷河を進む。気温が上がると膝程度のラッセルとなった。

ＢＣはバブＢＣと呼ばれるノシヤック氷河との出合近くの台地とアッパー・ティリッチ氷河が大きく屈曲する右岸のサイドモレーン上の2ヶ所と

なる。私達はジャパニーズＢＣとも呼ばれている後者の屈曲点をＢＣとした。私達のＢＣに行くには氷河を横断しなくてはいけないのでポーター達もあまりいい顔をしない。ラッセルをしながら昼前にＢＣへ到着した。

ポーターが帰ってゆくとＢＣは私達だけの世界となった。早速ＢＣを建設する。

ＢＣは膝位の雪で覆われ、まず除雪作業から始めなくてはならなかった。

キッチン用のカルカは雪の下となっているので、コックを中心に石を集め土台作りから始める。出来あがった石垣の囲いに一本の木を支柱にブルーシートを架ける。中々満足ゆく物は出来なかった。4,800ｍでの石運びは結構こたえた。

後日、このキッチンを見てイギリス隊の隊員は、日本人は建築は得意なはずなのだが…と首を傾げていた。

夕方、コックと岩崎さんで連れてきたヤギをばらす。このヤギは1,200RS（3,600円）で購入し、ポチと名付けＢＣまで連れてきたのだ。この肉はアタックが終わるまで持ち続け、私達の貴重なタンパク源となった。

15日、16日　ＢＣレスト

登山活動　ＢＣ～Ｃ３

17日　ＢＣ～Ｃ１～ＢＣ

ＢＣよりＣ１はアッパー・ティリッチ氷河をつめ、標高差1,000ｍ、距離にして８㎞と長い。順応していない体だときつい。過去の隊の報告でも最初5,300ｍ付近にデポ地を作っている。

私達もルート偵察と荷上げを兼ね、行ける所まで無理しないで行く。

▲ＢＣにて、右から３人目が連絡官

▼ザニパスの登り（後方はティリッチ・ミール）

ルートは氷河の雪の積もったモレーン上を行く。所々ケルンを積み進む。氷河上に入りしばらく進むと３時間程で5,300ｍのデポ地に着いてしまった。まだ余力が残っているのでＣ１まで行く事にする。

ここより氷河はアイスフォールとなっているが右岸沿いは緩い雪壁となっている。クレパスが出てきたのでロープを結びそこを乗っ越すと平坦となり5,800ｍ地点をＣ１とする。５時間半の行程だ。

荷物をデポしＢＣまで下る。途中から雪が緩みラッセルとなる。

18日、19日　ＢＣレスト

あっけなくＣ１へ一日で届き、荷上げも終わってしまったのでレストとする。

20日、ＢＣ～Ｃ１

今回はＣ１へ２泊し、Ｃ２（6,300ｍ）へのルート偵察と荷上げが目的である。

Ｃ１には昼前に着いてしまい暇を持て余す。

私達の一張のハイキャンプ用テントは結構狭い。又氷河上なので日中、日が当たると灼熱地獄となる。使用したパキ購入のガソリンは通称メチルガソリンと呼んでた程目にしみた。

私達の食糧は、β米（ＢＣで米を炊きそれを一日天日で乾燥させた米）にシルクロードより購入した自家製乾燥野菜を水で戻し、味噌や正油で雑炊にした物や、パキ製のマギーならぬまじぃのインスタントラーメンなどを組み合わせたものだ。

このように貧乏な隊は苦労が多い。

21日、Ｃ１～Ｃ２～Ｃ１

ロープを結び氷河を進む。ポイント・フラッグを立てながら、クレパスに注意しながら進む。

途中所々ヒドンクレパスが口を開けているのでうっとうしくてもロープは必携だ。

4時間半で6,300m地点に着きC2とする。

ここよりやっと正面にティリッチ・ミールが顔を出した。左側には西稜のバットレスが大岩壁となって続いている。

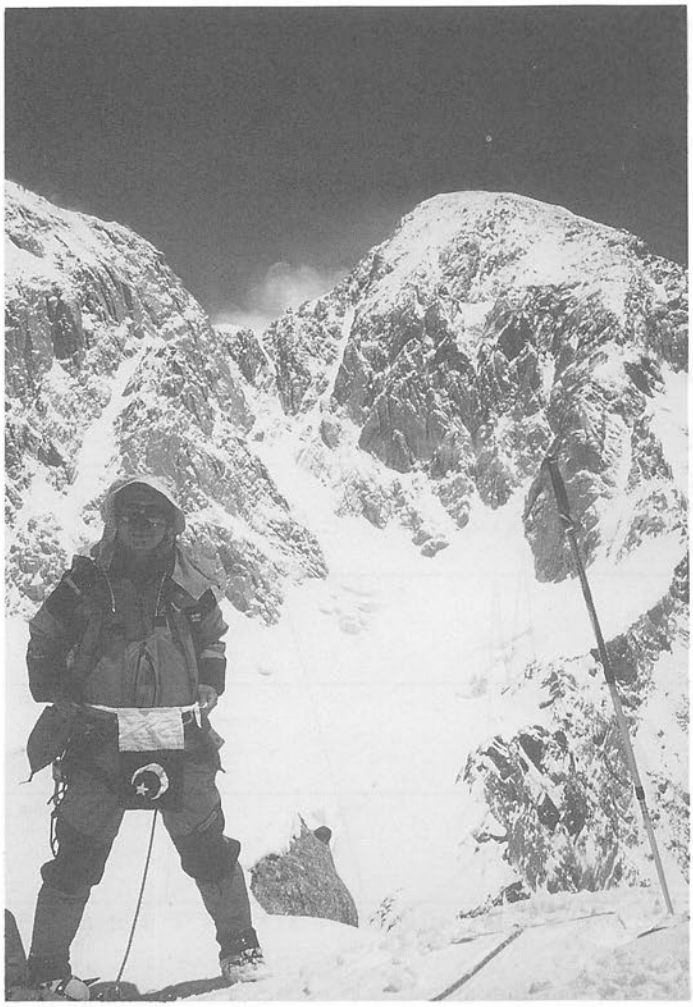
荷物をデポしC1へ下る。

昨夜は狭いテントで大変窮屈な思いをしたのでツエルトを張り今村さんはそこで夜を過ごす。

22日　C1～BC

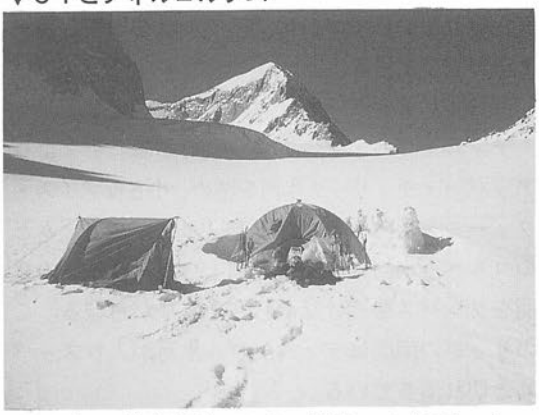
今日は午前中から天候は良くない。ヒンズー・クシュ地方は連日好天続きのはずのなだが…。特に午後からは必ずといっていい程崩れる。

23日、24日　BCレスト



▲ディルゴムゾム頂上から主峰とクーロアール

▼C1とディルゴルゾム



イギリス隊が私達のBCの対岸のバブBCへ入ってきた。今年は珍しくティリッチ・ミールに3隊入っている。

午後早速バブBCへ挨拶へ出掛ける。私達のBCからバブBCまでの氷河を横断するのに40分程掛かる。バブBCからはティリッチ・ミールを望む事が出来、テントサイトもお花畑の広がる平坦地で素晴らしいが40分余計に掛かるアルバイトを考えると私達のBCの方で良かったと思う。

イギリス隊の隊員の中には偶然にも昨年のプモリで一緒だった人がいた。

25日　BC～C1

今回の予定はC3（6,800m）への荷上げと、ディル・ゴル・ゾム（6,778m）へ登り順応と偵察を行ない、アタックに備える。

リエゾンに他の山へ登り順化トレーニングをしたい事を匂わせると、又レギュレーションを盾に2つの山域にまたがって登山をしてはならない、と釘をさされてしまったので、ディル・ゴル・ゾム登山は極秘に行なわなくてはならなかった。この山はアッパー・ティリッチ氷河の左岸に聳え、私達のC2～C3のルートを少し外れるだけで登れる。又核心部のクーロアールの偵察には持ってこいの場所にある。

BC～C1への移動は4時間半とだいぶ順化してきたようだ。

26日　C1～C2

テントを撤収しＣ２へと移動。ポイント・フラッグが足りないので半分に切って本数を増やしルート上に立ててゆく。

27日　Ｃ２～ディル・ゴル・ゾム～Ｃ２

ディル・ゴル・ゾムアタックである。Ｃ２よりアッパー・ティリッチ氷河を詰め、小さなアイス・フォールを超えると主峰とディル・ゴル・ゾムとのコルへと氷河は続くが、頂上へ続くリッジの北面をクレパスを避けながら右上しながら登る。このリッジの南面はディル・ゴル氷河が入りスッパリと切れ落ちている。

膝程度のラッセルを繰り返しリッジを登る。

Ｃ２より５時間掛かって頂上へ着いた。頂上からはティリッチ・ミールの西面が偵察できる。私達のいくコルへと突きあげるクーロアールも良くわかる。西峰Ⅰ（7,487ｍ）よりⅡ峰（7,450ｍ）、Ⅲ峰（7,400ｍ）、Ⅳ峰（7,338ｍ）と続いている峰は未踏ではないが縦走は成されていない、面白そうなルートだと思う。

頂上にある大きな岩のクラックにパキスタン・フラッグが残されており、それを掲げる。

下降中天候は雪となった。

28日　Ｃ２～Ｃ３～ＢＣ

昨日の登山で疲れが残ったが予定通りＣ３までの荷上げを行なう。

昨日のルートを進み、そのまま氷河を詰めると北壁へと消える。それより西面のクーロアールに入るのだがその手前にあるクレパスの陰をＣ３（6,650ｍ）とする。

荷物をデポしてＢＣへと下る。

29日～７月２日　ＢＣレスト

予定通りアタック態勢は整ったので４日間レストとする。

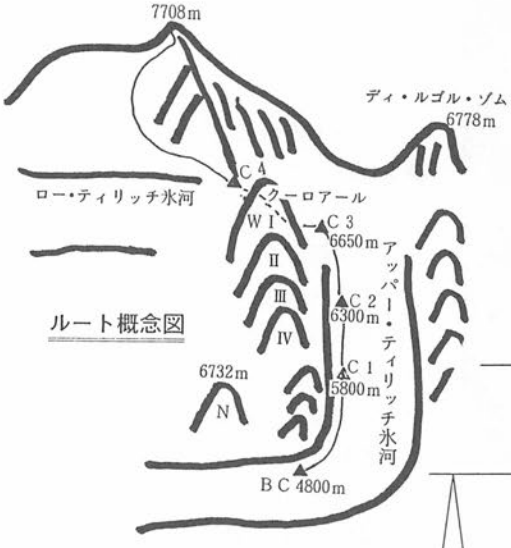
イギリス隊も行動を開始した。彼らはスキーを使ってこの氷河を行動しているが、大変有効だと思った。

天候はここ数日間好天が続いている、アタックまでもってくれる事を祈る。

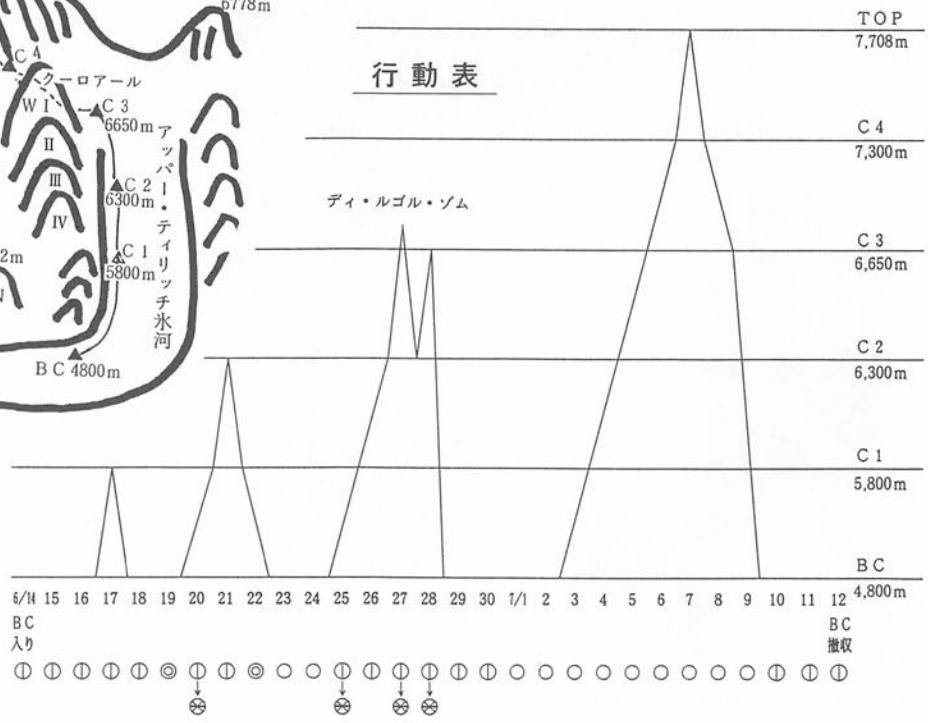
アタック

３日　ＢＣ～Ｃ１移動。

４日　Ｃ１～Ｃ２移動。



ルート概念図



5日　C２～C３

C３へは早目に着いたので、クーロアールの偵察へ出掛ける。

急な雪壁になった所を２P登りロープをFixし荷物をデポしC３へ戻る。クーロアールは雪が多く氷の露出は少ないので状態は良さそうだ。

なんとか一日でこのルートを登りきりたい。

6日　C３～C４（7,300m）

6時30分出発。先日のFixをたどり、ロープを回収し登攀を開始する。

ルートは雪壁となっており、側壁の岩場には古いロープやピトンが残されている。これを利用して登る。

上部には城壁の様に岩が覆っているが、門の様に大きく口を開けている所がありクーロアールはそこへ吸い込まれるように続いている。ここはこのルートの核心で60mのチムニーと呼ばれている。

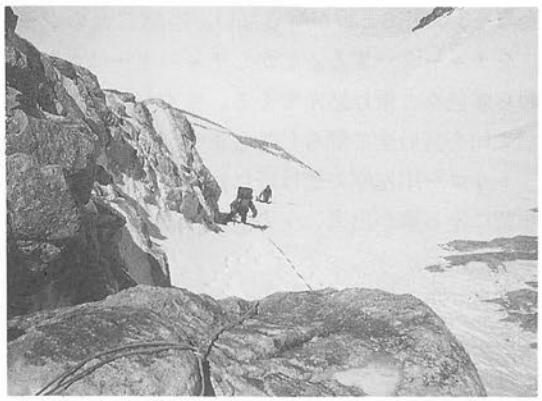
チムニーに入るまでは雪壁で、所々氷が露出している。むしろラッセルとなるので非常に疲れる。

チムニーに入ると残置ロープがスダレの様に垂れ下がっていて見苦しい。が7,000mラインでの岩登りは息があがり、古いロープを掴んで登ってしまう。

チムニーを抜けると再び氷雪壁となる。西峰とのコルは間近に見える。しかし傾斜はきつくなり氷も露出してきてダブルアックスなどで登ると、ふくらはぎは爆発しそうである。４P登ると雪の締まった雪壁となりコルへ飛び出した。

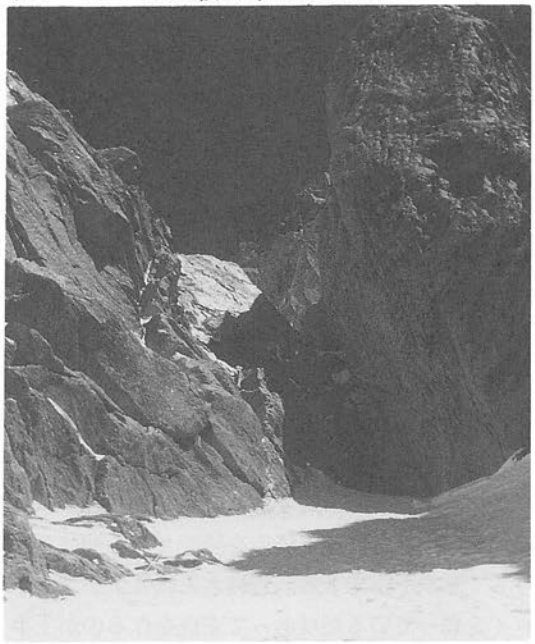
ここまで12時間の行動ですっかり疲れてしまった。

7日　C４～頂上～C４



▲クーロアールを登る

▼クーロアールの核心部60mのチムニー



7,300mでの宿泊はさすがにきつい。朝起きると大量の胃液を吐いてしまった。

5時15分日が当たるのを待って出発する。

コルよりピークは岩稜となっており、その右側は深いルンゼとなっておりスッパリと切れ落ちている。左側は雪面となってローアー・ティリッチ氷河へと落ちている。この左側の雪面をトラバス気味に登る。

岩稜に出るには過去の報告書を参考に、あまり手前から岩稜に入らず、岩稜から離れない所を左から廻り込む。

雪面からクーロアールとなりロープを結ぶ。３Pほどで岩稜をまくように岩場へと入る。ここの岩場で古いロープを発見する。３Pほど脆い岩場を登ると雪のルンゼとなり、さらに１P岩場を登ると、トップを登ってた岩崎さんより着いたぞとコールがかかる。そこから頂上までは傾斜の緩やかなガラガラな斜面となって続いている。ここでロープを外し、各自バラバラ頂上へ向かう。

14時30分、登頂。頂上は広く雪に覆われている、楽しみにしていたチトラルの街はさらに南側へ行かないと見る事が出来ない。

しかしノシャックを始めアフガニスタンの山々、イストール・オ・ナール、ティリッチ・ミール西峰、と素晴らしい景色が展開する。

トランシーバーでＢＣの文子さんと交信する。彼女はバブＢＣまで行き私達の登頂を見守ってくれたのだ。今回ルートは氷河上が長いためＢＣとはＣ１とこのアタック時のみ交信が可能だった。

ＢＣで待つ文子さんには随分と心配をかけてしまった。

ノシャックをバックに文子さん製作のオリジナル・フラッグを掲げ写真を撮る。

石を拾い下山に入る。

９Ｐほど懸垂下降をして雪面に降り立つ。

夕方６時、Ｃ４着。

私はすっかり疲れ果てぐっすりと寝てしまった。

８日　Ｃ４～Ｃ３

クーロアールの下降である。Fixロープが無いので気が抜けない。下降点を残置ピンを補強したりして懸垂下降で下る。岩崎さんはさすがフィツロイを登っているだけあって支点を作るのが上手い。

12時、Ｃ３着。

このままＣ２かＣ１、できればＢＣまで下りたかったが、Ｃ３で休んでいると気が抜けたのと疲れで動けそうにもない。今日はＣ３に泊まる。

９日　Ｃ３～ＢＣ

昨日Ｃ３へ泊まりだいぶ疲労も回復した。

Ｃ２、Ｃ１とデポ品を回収しながら下るので、荷物は雪だるま式に増えてゆく。今村さんは一番元気で特に大量の荷物を背負っている。

14時ＢＣ着。文子さん、コック、リエゾン達の祝福を受け、取り敢えず終わったんだ、という充実感に包まれた。

ＢＣ～帰路キャラバン

10日、11日　ＢＣ

うまい具合にサーダーが私達の様子を見に下からあがってきたので、うまくポーターの手配が出来た。

余った食糧をイギリス隊に譲ったり、ゴミを焼却したり、荷物を梱包したりと下山のための準備でいそがしい。

11日夕方ポーター達がＢＣへ上がってきた。みおぼえのある顔もある。キッチンで夜遅くまでポーター達は歌を唄い、盛りあがっていた。

▼ノシャックをバックに岩崎（左）と今村

12日　ＢＣ～ショゴロベースン

テントやキッチンを片づけ荷物をまとめると、ポーター達は出発した。私達も最後に残りゴミをチェックして出発。

氷河の状態も来た時とはだいぶ変わっている。

最後の風景を楽しみながらのんびりと歩く。

ショゴロベースンでは、私と岩崎さんはテントを張らず空を見ながらのオープン・ビバーク。さすがに明け方、風もあり寒かった。

13日　ショゴロベースン～シャニヤック

のんびりと一番最後を歩く岩崎さんに対して、リエゾンは、いつも遅いとスパイの疑いをかけると言ってきた。全くこまったものである。

氷河が終わると緑豊かなシャニヤック着。久しぶりの緑が大変心地良い。

14日　シャニヤック～シャグラム

半日程でシャグラム着。

夕食にはチキンと久しぶりの緑の野菜を食べる。

15日　シャグラム～チトラル

チャーターしたジープは一台なら2,500RS、二台なら3,000RSと訳が解らない。当然二台のジープをチャーターする。しかしチャーターにもかかわらず色々と乗り込んでくる、さすがにリエゾンが文句を言い全て降ろしてしまう。

トリコー川左岸の道は既に修復されていたので順調に走る事が出来、夕方前にはチトラルへ着く事が出来た。

16日　チトラル

リエゾンとコックはカフィリスタンへ観光へ出掛けていった。

私達はのんびりとティリッチ・ミールを眺めな

がらチャイをすする。

17日　チトラル〜イスラマバード

ワゴン車をチャーターして出発する。荷物が少ないのでゆったりと座れる。

ロワライ峠もあっけなく通過してしまった。

峠を降りディールへ着くと熱風が車内へ入ってくる。

夜20時、汗だくとなって暑いイスラマバードへ到着した。

その夜、待望のビールに酔いしれた。

ディブリーフィングを終わらせ、隊荷を整理する。

帰国まで少々日数があったのと、シルクロードが満室状態だったので、ペシャワールへ観光に出掛ける。余った隊費12,000RSを持っての豪遊の予定だったが、貧乏性の抜けない私達にはそれを使い切るには程遠かった。

野沢井、今村夫妻はラホールより日本へ帰国。

岩崎はそのまま残り、インド、サトパント峰へ継続した。

おわりに

ティリッチ・ミールへ行こう、と計画が始まり、出発まで半年間という短い期間しかなかったが、なんとか登山隊として態勢を整える事が出来た。

初めてのパキスタンでの登山という事もあり準備段階から解らない事だらけで新鮮だった。

いままで経験したネパールのシステムとも多少違っている。リエゾンやコックに対しも認識が違っていて、何回か彼等とは対立してしまった。しかし私が最初にパキスタンという国の文化、宗教、

▲ＢＣに残されていた日本隊のゴミ

▼突然破壊したプラスチック・ブーツ

民族性などを理解しておく必要があったと思う。

登山の方は目標としてたシンプルな登り方が出来たと思う。私はアルパイン・スタイルの持つ定義は解らないが、国内登山と同じ様に一つのテントでフィックス・ロープを張らないで登るスタイルで今回登山が出来大変満足している。しかし今回は３人という少人数で、しかも皆7,000〜8,000ｍ峰を何回経験していたメンバーだった事と、ティリッチ・ミールの今回のルートがこのスタイルにマッチしていたからこそ可能だったと思う。又、核心のクーロアールや頂上までの岩場は、Fixがないだけに一日で抜ける必要があり、下降も支点作りをしながらなのでプレッシャーがかかった。特にアタックは一回で登らないと7,300ｍでの長期滞在となり危険である。

金を掛けない遠征といった目標も達成できたと思う。要は現地に金を落とすといった感覚で、食糧や装備を現地で揃える事だと思う。

しかし金を掛けない分、自分達で汗を流さなくてはいけない、それらの苦労もヒマラヤ登山ならではの楽しい想い出となった。

最後に、頼りない隊長を支えてくれた岩崎さん、今村さん。いつも明るくチームを盛りあげてくれた文子さん。貧しいキッチンでやりくりしてくれたコックのアリ。色々とアドバイスを頂いたキンヤン・キッシュEXP。ヒマラヤ協会の皆様。派遣母体のバーバリアンクラブ。そしてシルクロードを始めパキスタンの方々へ大変感謝しております。

シュクリア！　　（文責：野沢井　歩）

地域ニュース

《パキスタン》

ブロード・ピーク縦走に成功

ブロード・ピーク（8,047ｍ）に挑んだ日本隊（戸高雅史隊長ら４名）の戸高隊長（33）と北村俊之（32)、服部徹（25）の両隊員は７月14日から20日にかけて、同峰を構成する三峰（北峰、中央峰、主峰）の縦走に無酸素で成功した。

この三峰縦走は1984年にポーランドのヴォイチェフ・クルティカとイェジ・ククチカの２人によって成し遂げられたが、日本人としては初めて。

千葉工大隊がナンガ登頂

ナンガ・パルバット（8,125ｍ）の北面ルートから挑んでいた、千葉工大登山隊（坂井広志隊長ら８名）は、７月23日に坂井隊長（38）と矢部幸男（29)、秋山武士（26）の両隊員が登頂に成功。

ティリッチ・ミールで韓国隊遭難

ヒンズー・クシュのティリッチ・ミール（7,708m）に挑んでいた韓国の京畿山岳聯名隊（14名）は、日本のバーバリアン・クラブ隊（野沢井歩隊長ら３名）と同じルートに挑み、７月26日に隊員３名がアタックした。然し、この３名は登頂後に消息を絶ち行方不明となった。

事故の第一報は、８月４日にイスラマバードに戻った同登山隊よりもたらされた。

韓国隊は今夏ブロード・ピーク（8,047ｍ）に挑んでいたChan-Gi Park隊長の率いる登山隊でも事故があり、１名が遭難した。

Ｋ２でA. ハーグリーブス遭難

８月18日付タイムズなど英各紙は、英国を代表する女性登山家アリソン・ハーグリーブスさん（33）が、世界第２の高峰Ｋ２（8,611ｍ）の登頂に成功して下山する途中に雪崩に巻き込まれ、死亡した可能性が高い、と報じた。また、英国内通信社ＰＡは、関係者の話として「生還する可能性は全くない」と伝えた。山頂から約580ｍ下った付近で大規模な雪崩に遭遇した模様。

ハーグリーブスさんは今春５月にチョモランマ（8,848ｍ）に挑戦し、女性として初めて単独、無酸素で登頂に成功したばかりだった。

キンヤン・キッシュ隊登頂断念

８月16日イスラマバードの飛田隊長から電話が入り、同隊は東壁の6,700ｍに到達したものの、登頂を断念し､15日全員イスラマバードに下山した。

8,000ｍ峰１山６隊までに

パキスタン観光省では、来年から8,000ｍ峰に入山許可する隊を１山につき６隊までと制限することになった。来年はＫ２とナンガに空きがある。

《ネパール》

世銀がダム計画の融資中止へ

世界銀行は、ネパールで計画していた大規模ダム建設への融資を、環境への影響などを考慮して中止することを決めた。外務省幹部が８月３日明らかにした。世銀がいったん計画した融資を自ら中止するのは極めて異例。

このダムはネパール東部のアルン河に水力発電用として計画された「アルンⅢダム」で、事業費は約７億６千万ドル。世銀はアジア開発銀行、日本、ドイツ、フランスなどに協調融資を要請していた。しかし、ネパールの非政府組織（ＮＧＯ）が反対運動を展開。これを受けて世銀が再調査した結果、中止が決まった。

トゥインズに再挑戦
東京農大隊

インド・シッキムとネパールの国境に聳えるトゥインズ（ジンミゲラⅠ、7,350ｍ）に、東京農大山岳会とネパール警察の合同隊（山下康成隊長）が挑むことになり、８月下旬に出発する。

東農大隊は1963年春、ネパール側から初登頂を目指したが、悪天候に阻まれＣ５（約7,000ｍ）を最高到達点に断念した。

その後、中印紛争のあおりでネパール側からの入山も閉ざされた。

1993年秋、明治学院大学隊がインド・シッキム側から許可を取得して、日本隊として30年振りに挑んだ時は、同隊に東農大ＯＢを参加させて同峰への執着をみせたが、そのＯＢの１人佐藤正倫氏（当時29才）がアタック途上、ヒドゥン・クレバスに転落死するアクシデントに見舞われた。今回は氏の遺体回収も図るとの事。

インド側は２年前の解禁後、昨秋、日本シッキム・ヒマラヤ登山隊（大滝憲司郎隊長）が挑んで成功が伝えられた後、２隊員が遭難死した。

インド登山財団は初登頂と認めたが、頂上に立った状況がはっきりしておらず、ネパール政府観光省は「未踏峰」としている。

《中　国》

観光バス転落、20数人が死亡
－四川省－

８月８日の新華社電によると、中国四川省茂汶県で７日午後、観光バスが谷に転落、乗客のうちフランス人観光客２人を含む20数人が死亡、24人が負傷した。

バスは都江堰市から観光地として知られる九寨溝へ向かう途中で、200ｍ下の谷に転落し炎上したという。

チャクラギール峰で遭難

中国新疆ウイグル自治区のチャクラギール峰（6,772ｍ）を目指していた福岡の「95チャクラギール登山隊」（７名）は、８月８日午後、海抜4,900ｍ地点で落石に遭い、北九州市門司区の北九州市立曽根東小学校教員、才藤哲也さん（39）が死亡、別の一人が軽傷を負った。

インフォメーション

東京集会のお知らせ

９月の東京集会はヌン隊の報告会です。ふるってご参会下さい。

日　時　９月25日（月）　19時～
会　場　ＨＡＪルーム（地下鉄東池袋駅下車）

サガルマータ映画と講演の夕べ

一昨年、日本中をわかせた群馬県山岳連盟の冬期サガルマータ(英名エヴェレスト)南西壁初登攀。その記録映画「世界初、雪煙に舞った男たち」の映画会と第３次隊で登頂した尾形副隊長の講演会が下記の通り開催されます。ふるってご来場下さい。

〔仙台会場〕
10月13日（金）開場18時、上映18時30分
仙台市シルバーセンター（ＪＲ仙台駅徒歩８分）

〔帯広会場〕
10月21日（土）開場18時、上映18時30分
宮本会館（日）（帯広市東２条南９丁目11番）

〔札幌会場〕
10月22日（日）開場18時、上映18時30分
札幌市教育文化会館（札幌市中央区北１条西13丁目７番）

〔見附会場〕
11月６日（月）開場18時、上映18時30分
見附市中央公民館（見附市本町２－５－９）

〔三条会場〕
11月８日（水）開場18時、上映18時30分
三条市中央公民館（三条市元町13－１）

〔福島会場〕
11月25日（土）開場18時、上映18時30分
福島県文化センター（福島市春日町５－54）

〔長野会場〕
12月１日（金）開場18時、上映18時30分
勤労者福祉センター（長野市旭町1108）

〔松本会場〕
12月２日（土）開場18時、上映18時30分
松本市中央公民館（松本市大手３－３－１）

〔諏訪会場〕
12月３日（日）開場18時、上映18時30分
岡谷市民会館（岡谷市本町４－１－39）

○入場料：大人1000円　学生800円　小中学生500円。最寄りの登山用具店などで発売中。
○問い合せ：スポーツニッポン新聞社事業部
☎03-3820-0651

チベット自治区発足30周年と パンチェン・ラマ後継問題

この９月１日、中国のチベット自治区では自治区発足30周年の記念式典が行われる。

1949年10月に中華人民共和国が成立して間もなく、人民解放軍がチベットに進駐し、チベットの中国化が本格化した。

1959年３月、チベットの宗教及び行政の長で、反中国の姿勢を明確にしていたダライ・ラマは、チベットのラサを脱出してインドへ亡命した。

ダライ・ラマのインド脱出後、中国側は、周恩来総理の名義で国務院命令をだして、チベット駐屯の人民解放軍に、責任をもって「反乱」を平定し、従来のチベット政府を解散させ、チベット自治区準備委員会に地方行政のすべての職務権限を行使させるよう命令した。さらに、チベットの自治区委員会の主任、ダライ・ラマが「反乱分子」に「誘拐監禁」されている間は、副主任のパンチェン・ラマに主任代行を命じ、アボ・アワン・ジグメを常任委員兼書記長に任命した。

その後、チベット自治区準備委員会は、土地制度改革、民主改革運動などを強力に推進していった。

そして65年９月１日、チベット自治区が正式に発足し、アボ・アワン・ジグメが主席に任命され、それまで名目上の主席であったダライ・ラマは主席から外された。それから30年が経った今、チベットでは、パンチェン・ラマの後継者を巡って、中国政府とダライ・ラマ亡命政権の間で新たな確執が起こっている。

パンチェン・ラマの転生児

チベット密教仏教（ラマ教）でダライ・ラマに次ぐ序列第二位のパンチェン・ラマ10世（パンチェン・エルデニ・チョギ・ギャルツェン）は、ダライ・ラマのインド亡命後も国外には出ず、チベットに留まった。66年から76年にかけての文化大革命では、10年間も獄中につながれた。釈放後は、中国のチベット政策を支持し、ダライ・ラマとは対照的な生き方をした。

ダライ・ラマがインドに亡命することになった59年３月のラサ動乱から丁度30周年を迎えようとする1989年１月にパンチェン・ラマ10世はチベットのシガツェで心不全のため亡くなられた。

パンチェン・ラマ10世をチベット統治の傀儡にしていた中国政府は、死後直ちに転生児の最終認定権は国務院にあると声明、「転生児調査委員会」を組織し、転生児探しに着手した。

ところが委員会のトップの高僧がインドのダライ・ラマに密かに情報を流した。ダライ・ラマもすぐに生まれ変わり探しに着手、チベット仏教界への圧倒的な影響力を背景に転生児探しの主導権を握った。

チベット全土に派遣された僧侶団は、転生の吉兆を示す児童30人を探し出した。第一次選抜である。この中には今回パンチェン・ラマの転生児として認定されたゲドン・チョエキ・ニマ（６歳）少年も含まれていた。89年４月、青海省に生まれたニマ少年は第一声で、「僕はパンチェン・ラマの生まれ変わりだ」と叫んだと言われ、これが吉兆とされた。

30人の詳細なデータと写真が密かにインドのダルムサラに居るダライ・ラマのもとに送られた。中国政府に見つかれば反逆罪で極刑の恐れもあり、使者の決死のヒマラヤ越えがあったのは想像に難しくない。

ダライ・ラマは書面審査で20人に絞り込んだ。第二次選抜である。ここで暫く冷却期間置いた。「まだ吉兆を示す少年が出るかもしれない」からである。

やがてダライ・ラマは最終選考をしてよいかどうかを占う「モ」を行った。この「モ」は秘儀中の秘儀、瞑想を済ませたダライ・ラマが３個の木製サイコロを同時に振る。事前に決めた数字をピ

タリと示せば「吉」とされる。しかし、「まだ早い」という結果が2度でた。

第一次選考から2～3年経った昨年暮れに行った「モ」は「選考者の中に生まれ変わりがいる。時期もよし」と出た。

今年の正月、チベット仏教の高僧の見つめる中でダライ・ラマは最終選考を行った。ツァンパの粉をこねて親指ほどに千切り、同じ重さにした20個の1つずつに候補者の名前を書き、丸めて陶器皿の上に置く。ダライ・ラマがその皿を回すと塊が一つだけ落ちた。落ちた塊にはニマ少年の名前があった。2度目もニマ少年であった。かくてパンチェン・ラマ10世の生まれ変わりが決定したのである。

一方、中国政府の調査団の方は、懸命の探索にもかかわらず成果が上がらず、昨年から10歳のカルマパ14世（註1）を国慶節祝賀行事に招くなど優遇し、ダライ・ラマに対抗してきた。

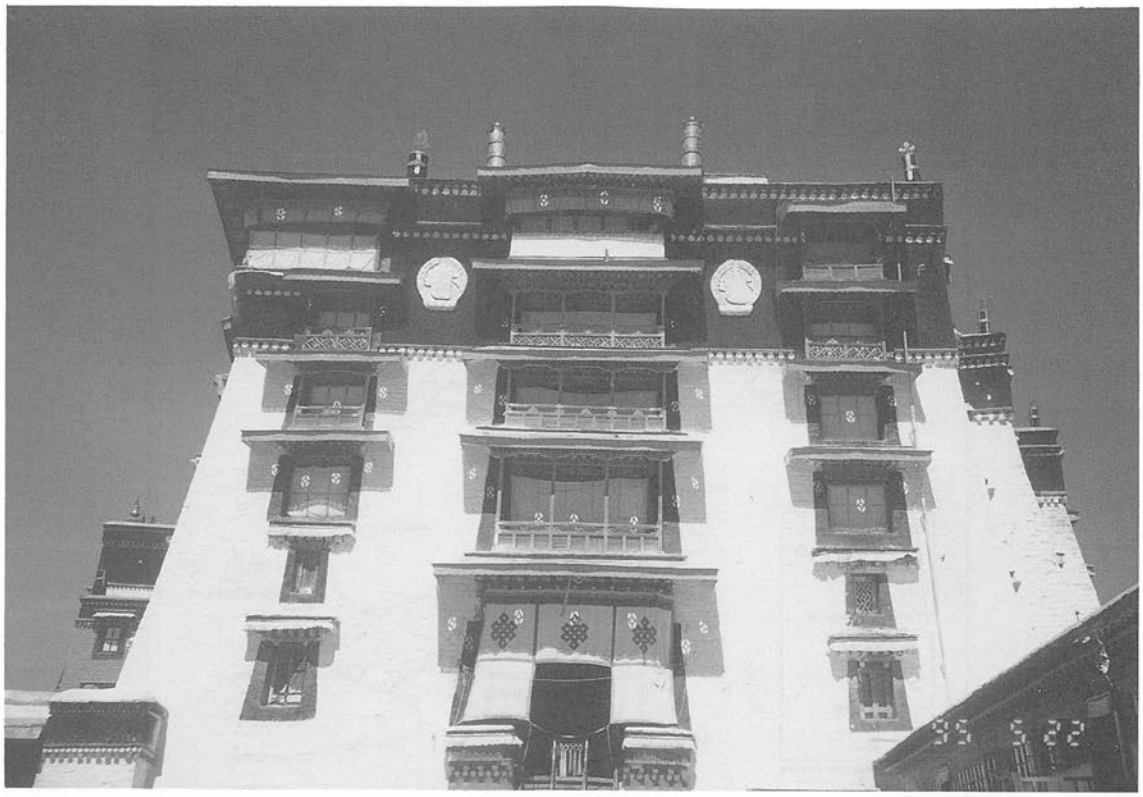
パンチェン・ラマの生まれ変わりをめぐる中国政府とダライ・ラマ亡命政府の第一ランドは先に探して認定したダライ・ラマに軍配が上がった形であるが、中国政府はダライ・ラマに認定権はないと主張する。だが、ニマ少年を否定もせず、独自に転生児を探す動きも見せていない。

チベット仏教界へのダライ・ラマの影響力は無視できない。

今後の問題は、生まれ変わりをどちらが確保するかだ。ダライ・ラマは中国政府の影響の及ばない場所で教育したいと願っている。だが、中国政府は亡命政権の影響が及ばないよういち早く少年を隔離した。ダライ・ラマ亡命政権は6月17日、「ニマ少年が北京に連行された」との情報を入手したが、少年の所在に関する情報は無い。中国政府は一切の公式論評を避けている。

亡命政権としては、折角、認定しても本格的な教育をする前に隔離されてしまっては、どうしようもない、との思いであろう。

＊註1：チベット仏教主要4派の中で、ゲレク派のダライ、パンチェン両ラマとカギュー派のカルマパが指導者の生まれ変わりを認める活仏制度を採用している。カギュー派のカルマパが現在17世である。



▲今世紀最大規模の改修が行われたチベットの象徴ポタラ宮であるが、かかえる問題は深刻である。

その4　西シッキム

ダージリンからガントックへ

推奨期間：2月初旬から3月下旬
　　10月初旬から12月下旬
概算費用：約1920ドル
参考日程：カルカッタ発、カルカッタ帰着。
　　16日間

第1日：カルカッタ滞在

カルカッタ出発準備。その夜はカルカッタのホテルに泊まる。

第2日：カルカッタからバグドグラ経由ダージリンへ（空路とジープ）

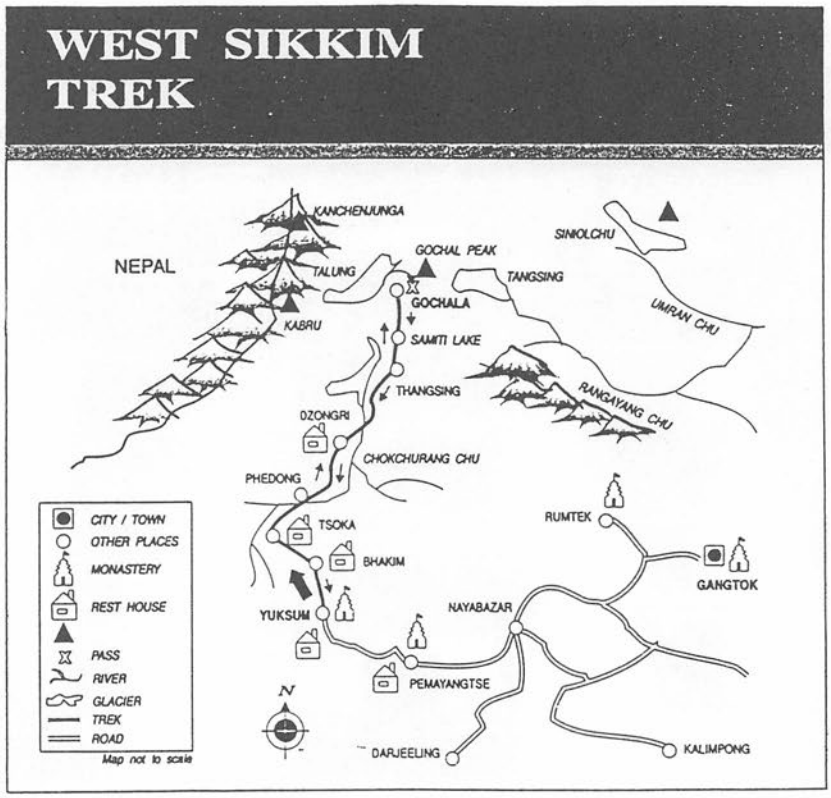
早朝にカルカッタを空路で出発し、バグドグラ（Bagdogra）着。バグドグラをジープで出発し、途中で昼食をとり、また、ダージリン紅茶の茶園を訪問したり、道路とほぼ平行に走っているトイ・トレインと呼ばれる小さい汽車の走る狭軌鉄道を見学したりしながら約5時間のドライブで標高約2134mのダージリンへ（Darjeeling）に午後着。走行距離は約110kmである。

ダージリンは「王冠の宝石」と呼ばれているすばらしい眺めのヒマラヤの展望台である。ダージリンではヒマラヤの見えるホテルに泊まる。

第3日：ダージリン滞在

早朝、タイガー・ヒルに車で登り、日の出と、世界第3位の高峰であるカンチェンジュンガとその連峰の展望を楽しむ。

ドーンガリ・デヴィ寺院（Dhongari Devi）、ヴァシシュト温泉（Vashisht Bath）、ジャガックー（Jagatsukh）などの観光地を訪ねる。ダージリンリのホテル泊。



第４日：ダージリンからヨクサムへ（ジープ）

ダージリンからヨクサムまでは約123㎞ある。ダージリンを早朝出発し、７時間ほどかかり、標高約1780ｍのヨクサムに着く。

ヨクサムはシッキムの昔の首都で1624年に当時の最初の王様が住んでいたところである。また、1700年に建立された現存する最古のお寺がある。

その夜は山小屋に泊まる。

▲バグドグラからダージリンへのトイ・トレイン

第５日：ヨクサムからバキムへ（トレック）

トレッキングの第１日目は約13㎞を４時間ほどかかって歩き、標高約3035ｍのバキムへ達する。

コースは、パイラク・チュウ（Pairag Chu）の流れに沿って続く、うっそうとした亜熱帯の林の中の道をゆったりと上り下りする道である。

その夜は森林の中にあるフォレスト・ハットと呼ばれる山小屋に泊まる。

▲トイ・トレインの走る幅が狭く、急勾配の鉄道

第６日：バキムからゾングリへ（トレック）

バキムを出発するとすぐに急な登りとなる、きついトレッキングとなる。しかし、色とりどりのシャクナゲの林が続き、花や緑を楽しむことがで

▲ダージリンからのカンチェンジュンガ

きる。約12kmを4時間かかって歩き、ゾングリに着く。ゾングリではトレッカーズ・ハットと呼ばれる山小屋に泊まる。

第7日：ゾングリからタンジンへ（トレック）

ゾングリからタンジンまでは約8kmあり、3時間ほどのトレックである。トレッキング中のゾングリ峠（Dzongri Pass）からカンチェンジュンガ、パンディウム、カブールーなどシッキムの名峰が眺められる。

タンジンではテントに泊まる。

第8日：タンジンからシムティ湖へ（トレック）

タンジンからシムティ湖まで約8kmあり、3時間ほどのトレッキングである。

シムティ湖はヒマラヤ山脈の麓にあり、標高は約4200mある淡水湖であり、神聖な場所として住民からあがめられている。

その夜は湖のそばにテントを張って泊まる。

第9日：シムティ湖からゴチャラ往復（トレック）

シムティ湖からゴチャラまで約14kmあり、5時間ほどのトレッキングである。

ゴチャラの峠は標高約5000mあり、ここから巨大なカンチェンジュンガ、カブールー、カブールー・ドームなどが目の前にそびえ立っている。

シムティ湖に帰り、湖のそばでテント泊。

第10日：シムティ湖からタンジンへ（トレック）

シムティ湖から約8kmを3時間ほどトレッキングしてタンジンに到着する。テント泊。

第11日：タンジンからゾングリへ（トレック）

前日とほぼ同様に、タンジンから約8kmを3時間ほどトレックしてゾングリに到着する。テント泊。

第12日：ゾングリからツォカへ（トレック）

ゾングリを出発すると風の強い道を歩くようになり、フェドン（Phedong）まで下る。このコースはシャクナゲの林の中の道でもある。ゾングリからツォカ（3710m）まで約9kmを3時間ほどトレッキングである。

その夜はトレッカー・ハットで泊まる。

第13日：ツォカからヨクサムへ（トレック）

朝食後、約5km、2時間ほど短いトレックでお昼前にヨクサムに着く。午後はヨクサムの古いお寺などを見物する。

その夜はトレッカー・ハットで泊まる。

第14日：ヨクサムからペマヤンツェ経由ガントクへ（ジープ）

ヨクサムからペマヤンツェ（2085m）まで約30km、1時間のドライヴである。ペマヤンツェにはシッキムで古いものの一つであり、また、重要なお寺とされている寺院がある。

ペマヤンツェからガントク（1810m）までは約110kmあるが、道路が悪く、5時間ほどかかる。

ガントクでホテルに泊まる。

第15日：ガントク滞在

ガントクの街にあるチベット研究所、ランの植物園、ド・ドゥル寺院、手工芸センターなどを見学する。ホテル泊。

第16日：ガントクからバグドグラ経由カルカッタへ（ジープと空路）

ガントクからバグドグラ空港へジープで向かう。バグドグラからカルカッタに空路到着する。急げば、そのまま国際線に乗り継ぐことができる。

（編・著　沖允人）

▲ダージリンのヒマラヤ登山学校（入口）

２－１　ウルグ・ムスターグ（烏拉格木孜塔格・Ulugh Muztagh）

＊山脈：崑崙山脈。東部の最高峰。

＊位置：ホータン（1374ｍ）の東南東約375㎞。
ゴルムドの西約748㎞。
［36° 28′ N、87° 27′ E］

＊アプローチ：ウルムチ（654ｍ）からコルラ（901ｍ）を経てチャルクリク（若羌888ｍ）までジープで２日。チャルクリクから更にジープでマンナイ（3800ｍ）、鴨子泉（3640ｍ）、アチク湖（4125ｍ）、月牙河を経て北東面ＢＣ（5250ｍ）までジープで５日間かかる。アチク湖まで4950ｍ、4706ｍなどの峠を越える。また、マンナイを出て僅か90㎞を進むのに11時間を要する。

＊ルートの所要日数：85年初登頂時は、ＢＣ設営から21日目に登頂。89年の立正大はＢＣ設営から18日目に登頂した。

＊山の概念：主峰6973ｍ。北西峰6925ｍ。南西に6608ｍ、6573ｍなどの峰があり、西に6352ｍ峰、北東に6391ｍ峰、北に6364ｍ峰などの衛星峰がある。また、この地域1200㎢の中に6000ｍを超える峰が54座ある。

＊通常の登山時期：７月～10月

＊山名：フランスのデュトルイユ・ド・ランと同行し、ウルグ・ムスターグを最初に見たといわれる、フェルディナンド・グルナールが命名したといわれ、その意味はトゥルキ語で大きな氷河。他の解釈ではウイグル語、カザフ語、タジク語でムスターグは山、ウルグは偉大の意。

＊小史：登山としては無い。チベットを目指した探検家達が、近くまで接近した記録がある。1889年12月にボンヴァロとアンリ・ドレアン。1893年秋のランとグルナール。1895年５月のショージ・Ｒ・リトルダール夫妻。この時のリトルダールが測量した7724ｍと云う標高が、つい最近まで使われていたのである。翌96年８月にはヘディンも望見している。

尚、1990年にチェルチェンからラクダを使用してウルグ・ムスターグに入ったイギリス隊の報告書が「ARKA TAGH」として出版された。この本には、前述したランとリトルダールも載っているので参考になる。

＊参考文献：崑崙の秘境探検記［周正／田村達弥訳　中公新書　昭和61年刊］　謎の山ウルーグ・ムスターク（深田久弥）［岳人261号］　リトルデール夫妻（深田久弥）［岳人263号］　ウルグ・ムスターグの謎と正体（水野勉）［岳人444号　1984年６月号］　ウルグ・ムスターグ初登頂（周正／尾形好雄訳）［ヒマラヤ177号　昭和61年８月号］　中央アジア文献逍（水野勉）［山書研究28　昭和59年３月刊］

登山の概要

■ **主峰（6973ｍ）**

1985年

９月～10月　南東面　中国／アメリカ

９月21日ウルムチを出発。10月２日5250ｍにＢＣ設営。７日Ｃ１、11日Ｃ２5800ｍ、18日Ｃ３6300ｍ、21日Ｃ４6500ｍ、22日漢族の胡峰嶺と張保華、前星、カザフ族の阿達拉西（アルタシ）、ウイグル族の馬木提（マームード）の５名が19時27分初登頂に成功した。しかし下降中に胡と張が150ｍ滑落、翌朝負傷しているところを発見された。Ｃ３に収容されたため、二次アタックの準備をしていたアメリカ側も救援に回り頂上の機会を失った。

［中国側隊長：甄希林、胡峰嶺、張保華、前星、買買提、王勇、怕子里、阿達拉西、張鋭、張智光、馬木提、魏寧、王振華］

アメリカ側隊長：ニコラス・クリンチ、トーマス・ホーンバイン、ピーター・シェーニング、デニス・ヘネック、ジェフリー・フート、バレル・バーチフィール、ピーター・

モルナー、ロバート・ベイツ］

1989年

7月～9月　南東面　立正大学／新疆大学

7月29日ウルムチを出発。8月13日北東面氷河5200mにBC設営。27日南尾根上5870mにC3設営。31日10時間かけて、古川ら6名が登頂に成功した。

［日本側隊長：宇田川芳伸（47）　古川史典（40）　春山和雄（38）　藤江義夫（33）　今枝宏中（31）　菅原英治（29）　荒木恵（25）　影山秀樹（23）　小川健司（23）　紙谷等史（21）　土門正人（21）　西田正生（22）　小玉浩（20）　矢作信司（20）　山岸和夫

［中国側隊長：陳栄昌（55）　趙銓（21）　徐国紅（20）］

2－2　カシタシ（喀什塔什山・Kaxtax）

＊山脈：崑崙山脈。西部崑崙山脈。

＊位置：ホータン（1374m）の東南東約218km。

［36°　′N、82°　′E］

庫台克力克山群の東北東

＊アプローチ：北面からのBCへは、ウルムチからホータン（1374m）までは飛行機で2時間。于田（ケリヤ）からアチャンまではジープで1日。キャラバンはロバ。

＊ルートの所要日数：

＊山の概念：主峰6699m。他多数の6000m峰あり。

＊通常の登山時期：夏

＊山名：ケリヤ河の支流であるカシタシ川の源頭にあるため。

＊小史：無し。

＊参考文献：中国崑崙山脈　無名峰6699mの探査・5740m峰の初登頂［福岡山の会］

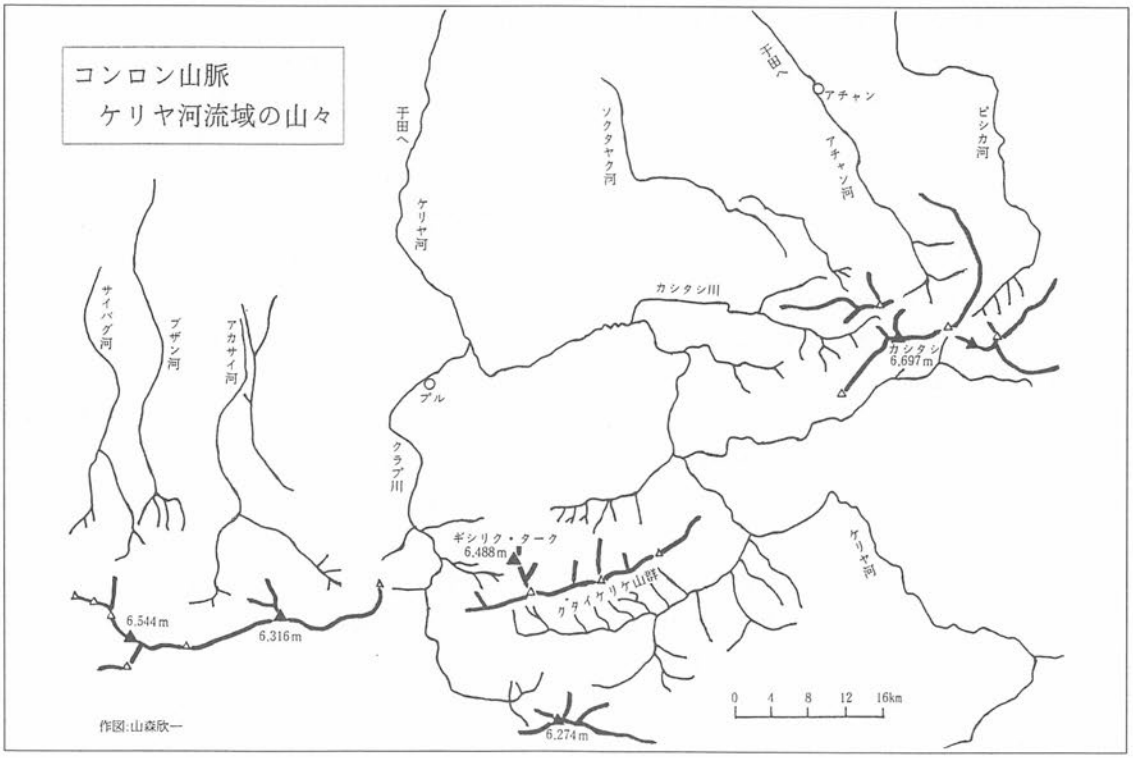
登山の概要

■ **主峰（6697m）**

1987年

7月～8月　北稜　福岡山の会

8月1日3800mにBC設営。リュシ川左俣



にルートを伸ばし、12日5740m峰に松永、安徳が初登頂した。主峰は谷を挟んだ南にあり、右俣との出合いまで下り、右俣を遡行し松永と高崎が、4200m、5200mとビバークして16日北稜からアタックするも、ラッセルとギャップに阻まれ5970mで断念した。

［隊長：諸岡久四郎(61)　岡崎猷之(45)
松永碩雄（44）安徳俊一郎（34）高崎渉（34）
高橋勝子（38）木村寿子（38）太田育子（31)］

2－3　クタイケリケ（庫台克力克・Kutaikelike）

＊山脈：崑崙山脈。西部崑崙山脈。
＊位置：ホータン（1374m）の南東約200km。
［36° 00′ N、81° 37′ E］
＊アプローチ：北面からのＢＣへは、ウルムチかホータン（1374m）までは飛行機で2時間。于田（ケリヤ）からアチャンまではジープで1日。キャラバンはロバ。
＊ルートの所要日数：
＊山の概念：主峰6488m。他多数の6000m峰あり。
＊通常の登山時期：夏
＊山名：地元では主峰をギシリク・タークと呼ぶ。ウイグル語でギシリクはスペードの意。タークは山。
＊小史：無し。
＊参考文献：

登山の概要

■ **主峰（6488m）**

1994年
7月～8月　西面偵察　山形県山岳連盟
菅原和明（39）と清野昭一（45）が西面に入り偵察を行い、山名の由来なども収集した。95年に本隊を派遣した。

2－4　6903m峰

＊山脈：崑崙山脈。西部崑崙山脈。
＊位置：ホータン（1374m）の南約213km。
［35° 12′ N、81° 10′ E］
7167m峰の東
＊アプローチ：南面からのＢＣへは、ウルムチかカシュガル（1289m）までは飛行機で2時間。イエチェン、セラク峠（4885m）、マザーを経てアクサイチン湖までは7167m峰と同じアプローチ。さらに東のゴーツァツォ（郭扎湖）まで1日。湖の北側（東寄り）の崇測氷河付近（5300m）をＢＣとする。アクサイチン湖から先は、夏期の高原の状態次第で相当の難儀が予想される。
＊ルートの所要日数：88年京大隊は、実質11日で登頂。
＊山の概念：主峰6903m。南に6820m峰。西に6743m峰。崇測氷河左岸に6716m峰と6570m峰などがある。
＊通常の登山時期：春～夏
＊山名：無し。
＊小史：無し。
＊参考文献：1988年京都大学崑崙学術登山隊報告書［京都大学学士山岳会　1994年6月刊］

登山の概要

■ **主峰（6903m）**

1988年
7月～9月　南面　京都大学
8月11日5300mにＢＣ設営。崇測氷河にルートを伸ばし、21日6820m峰とコル（6500m）にＣ3を設営した。翌日伊藤、毛利が主峰、人見と睦好が6820m峰を同時アタックした。6820m峰パーティは6650m付近で表層雪崩に約200m流され、睦好が負傷したためアタッ

クを中止した。主峰パーティは、18時半毛利が初登頂した瞬間、足元から表層雪崩が発生し100m流されたが伊藤の確保で止まった。このため登頂として下山した。尚、2つのパーティが雪崩に遭遇した事で、「大陸内部の気象と雪の状態が、日本、ヒマラヤでの山岳地帯での認識とは異なっていた」と報告している。
［隊長：能田成(47)　人見五郎(32)　伊藤宏範(30)　毛利尚樹(24)　睦好正治(21)　寺島彰(39)　乙藤洋一郎(38)　三輪佳宏(40)　浅野純一(30)　遠山仁(36)　福島申二(32)］

2－5　7167m峰（崑崙最高峰）

＊山脈：崑崙山脈。山脈の最高峰。
＊位置：ホータン（1374m）の南南東約218km。
［35° 20′ N、80° 55′ E］
＊アプローチ：南面ＢＣの場合。ウルムチかカシュガル（1289m）までは2時間の旅。イエチェン、セラク峠（4885m）、マザー、黒峠（4870m）、大紅柳灘、奇台大坂（5020m）、甜水海（4825m）、アクサイチン湖を経て里田河ＢＣ（5315m）までジープで7～8日間。工程中に高い峠を幾つも越える。
＊ルートの所要日数：86年東京農業大学隊は、実質24日で登頂。
＊山の概念：主峰7167m。
＊通常の登山時期：7月～8月の夏期。
＊山名：無名峰。初登頂した東京農業大学隊の錦内信彦総隊長は、報告書の中で［アグリ・ムスターグ（阿公李木孜塔格）と云う名を贈りたいと述べている。
＊小史：無し。
＊参考文献：中国崑崙山脈7167m峰登山隊1986［東京農業大学農友会山岳部／東京農業大学山岳会　1988年1月刊］　東京農業大学崑崙7167メートル峰（早坂敬二郎）［山岳第八十二年　1987年12月刊］　幻の中央アジアの最高峰（早坂敬二郎）［山と渓谷615号　1986年12月号］

登山の概要

■ **主峰（7167m）**

1986年
6月～8月　南面から東稜　東京農業大学
7月20日南面里田河の5315mにＢＣ設営。中峰氷河出合いにＣ1（5541m）、西面氷河を登り南面氷河上にＣ2（6194m）を出し東稜に取りつき、8月12日東稜上6687mにＡＣを設営する。16日小林、中嶋、馬場、佐藤、沼野の5名が初登頂。さらに馬場と佐藤が下からは高く見える北側の頂を一時間で往復したが高度計は同高度を示した。17日にも早坂から残る6名も登頂し、早坂、福沢が北側の頂を往復した。
［隊長：早坂敬二郎(38)　小幡邦夫(32)　小林新二(30)　中嶋真也(26)　馬場哲也（26）　村田岳(23)　福沢幸子(22)　佐藤正倫(22)　沼野幸正(21)　須ケ原光弘(40)　増山茂（38）

1992年
7月～8月　南面　西陣山岳会
南面から入山するも登頂断念した。

2－6　チョルパンリク・ムスターグ（Cholpanglik Muztagh）

＊山脈：崑崙山脈。西部崑崙山脈。
＊位置：ホータン（1374m）の南約163km。
［35° 50′ N、80° 05′ E］
＊アプローチ：ウルムチかカシュガル（1289m）までは飛行機で2時間。イエチェン、セラク峠（4885m）、マザーを経てアクサイチン湖（4885m）までは7167m峰と同じアプローチ。5360mのＢＣまでジープで8日間。
＊ルートの所要日数：89年仙台隊は、実質24日で登頂。

＊山の概念：主峰6524m。
＊通常の登山時期：7月～8月の夏期。
＊山名：オーレル・スタインにより7105mと測量されていた峰。
＊小史：無し。
＊参考文献：CHOLPANLIK MUZTAGH［仙台一高山の会　1990年7月刊］

登山の概要

■ 主峰（6524m）

1989年

7月～8月　南面　仙台一高山の会

7月19日5360mにBC設営。31日スノープラトーにC2（6010m）を設営した。8月9日佐藤、保坂が氷河最奥の6510m峰に初登頂。13日6480m峰を越えたところにC4（6460m）設営。14日山形、後藤、保坂が6490m峰、6449m峰を越えてジャンクションから対岸に登り返し、出発後9時間半で主峰の初登頂に成功した。尚、帰途はBCからカシュガルまで3日間であった。

［隊長：佐々木和夫(41)　佐々木耕二(37)　佐藤栄一(36)　山形一朗(31)　後藤均(30)　大江洋文(29)　吉岡敏明(26)　保坂正美(25)　太田尚志(21)］

2－7　ムーシュ・ムスターグ（慕士山・Muztagh）

＊山脈：崑崙山脈。西部崑崙山脈。
＊位置：ホータン（1374m）の南約140km。［35° 57′ N、80° 13′ E］
＊アプローチ：ホータンから台堤（3540m）までジープで一日。ここから馬やロバを使用し、二日間で4200mのBC地に到着する。
＊ルートの所要日数：89年栃木隊は、実質20日で登頂。
＊山の概念：主峰6638m。
＊通常の登山時期：7月～8月の夏期。
＊山名：地元では「氷の山」の意。以前から測量記号でE61とされていた。また、オーレル・スタインにより7282mと測量されK（崑崙）5と呼ばれた。
＊小史：W.H.ジョンソン1866～67年に登ったと報告。フレッシュフィールド達がこれを支持したと云うが、1921年になって登頂していない事が判明した。
＊参考文献：

登山の概要

■ 主峰（6638m）

1985年

7月～8月　北面から偵察　中国／HAJ

8月4日南面4240mにBC設営。8日4610mにC1を設営した段階で本峰登頂を断念し、目標を周辺の無名峰（5850m）に変更し、25日小泉、市川、木下、馬力が初登頂。27日に森、早川、小林、雷も登頂。

［隊長：森美枝子(44)　木下祥子(41)　早川昭子(36)　市川春代(35)　小泉恵子(31)　小林佳子(27)　福田裕子(25)　中国側：馬力(24)　雷雲霞(23)］

［地球の背骨の一角に立つ 1986年5月刊］

1990年

7月～8月　東稜　栃木県高体連

7月28日4150mにBC設営。8月12日5860mのC3から頂上アタックを行うも6320m上で敗退。17日6250mにC4を設営し、翌18日渡辺、石沢の2名が初登頂に成功した。

［隊長:渡辺雄二(38)　野村平八(56)　蓮實淳夫(49)　佐藤清衛(55)　石沢好文(37)　土屋晴夫(53)　茂呂貞夫(50)　竹澤雄三(47)　桑野正光(45)　増渕仁一(41)　駒林昭(38)　粂川章(38)　滝田道明(38)　神島仁誓(35)　古橋久徳(31)　富永孝昭(28)　後藤尚(28)　半田好男(27)　麦倉常治(22)　菅又久雄(20)　臼井恵太郎(31)］

1991年

7月～8月　西稜　福岡教育大学

悪天候や隊員の高度障害のために5400mで登頂を断念した。

■ 寸 感 ■

夜中の２時過ぎに電話のベルで起こされた。夜中の電話に良い知らせはない。何んだろうと受話器を取ると、ソウルからだと云う。話はヒンズー・クシュで３名が遭難したので助けてほしい、と云う。聞くともう10日以上前の話で、残りのメンバーがイスラマバードへ戻って事故の第一報がこの日届けられたとの事。パニック状態の騒然とした雰囲気が電話を通して感じられた。ご両親は今直ぐにでも現地に行きたがっている。現地で救助隊を編成出来るか。ヘリコプターは利用出来ないか。お金はいくらかかってもよいから何んとかしてほしい……等々。それから30分近く現地の状況、ヒマラヤなど高峰での事故対応について延々と話すハメになった。現地の事情をまったく知らないようで、こと細かに教えねばならず、この隊は事前に家族会のような説明会をやってないな、と思った。

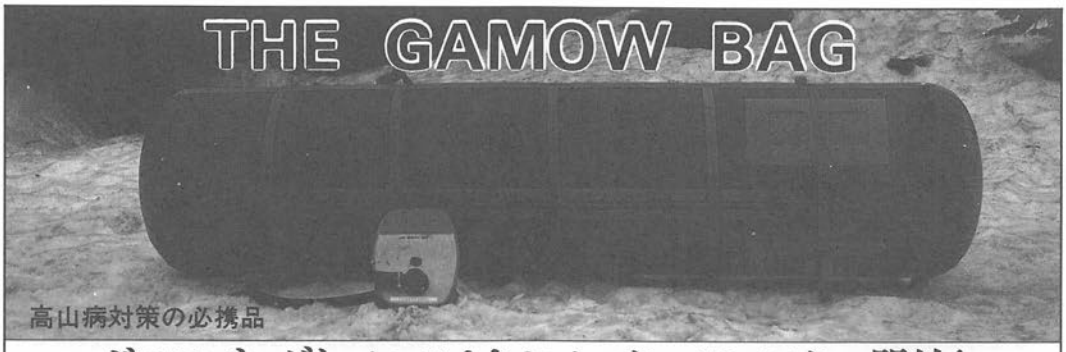
それにしても遭難の問い合わせが深夜ソウルから来るとは、世界も随分せまくなったものである。

事務局日誌（８月）

11日（金）　ヒマラヤNo.286発送
15日（水）　キンヤン・キッシュ隊イスラマ・バードに帰着
20日（日）　ヌン隊カルギルに下山し登頂報告入る。8／16に４名が登頂。
27日（日）　ヌン隊、キンヤン隊帰国
28日（月）　東京集会（14名）

ヒマラヤ No.287（10月号）

平成７年９月10日印刷　　７年10月１日発行
発 行 人　稲 田 定 重
編 集 人　尾 形 好 雄
発 行 所　日本ヒマラヤ協会
〒170　東京都豊島区東池袋４－２－７
　　萬栄ビル501号
　　電 話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約２０００m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
（血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型）

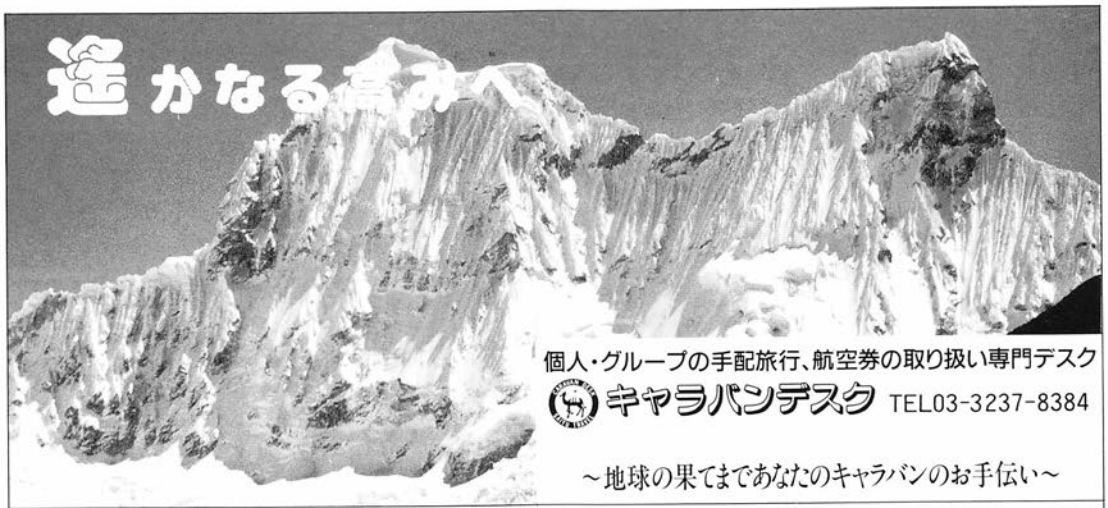
総代理店 ： **日本メディコ株式会社**
レンタル・販売問い合わせ先 ： **株式会社 ティ・エッチ・アイ**
〒135　東京都江東区木場２-５-７　KHビル７階
ＴＥＬ：03-5245-0511　FAX：03-5245-0510
（隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。）

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

——遠征隊、トレッキング、秘境への旅——
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
三井航空サービス代理店2452号



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク
キャラバンデスク TEL03-3237-8384
～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア

株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(3237)1391(代表)
キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル4階 ☎03(3237)8384(代表)
大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
● スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
●新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
●新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
●神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
●神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
●神田ウェアー館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
●八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
●アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
●川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
●大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
●高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
●松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
●新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330
●新潟プラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
●仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
●盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
●札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
●ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
●北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
●2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
●旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
●外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219

ICI石井スポーツ

事　務　所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004